

# 障害者アートマネジメントセミナー「障害者アートの可能性について」6 ディスカッション「アートの本質とは?」



## 前山裕司（埼玉県立近代美術館学芸員、美術評論家）

1981年筑波大学大学院博士課程中退。準備室から埼玉県立近代美術館に勤務。同館で「動きの表現」(1988年)、「風刺の毒」(1992年)、「やわらかく重く—現代日本美術の場と空間」(1995年)、「トルコ美術の現在　どこに？」(2003年)、「ロシアの夢 1917-1937」(2009年)、「日本の70年代 1968-1982」(2012年)などの展覧会を企画。また、ブダペストとモスクワを巡回した「心の在り処」(2003-04年)をキュレーション。2009年「障害者アートフェスティバル」実行委員を務めて以降、今年度まで「埼玉県障害者アート企画展」に携わり、また、2012年「アール・ブリュット・ジャボネ展」を、2015年には埼玉、札幌、高知、福山を巡回した障害者アートの展覧会「すごいぞ、これは！」を企画。2016年、国立新美術館で開催した展覧会「ここから—アート・デザイン・障害を考える3日間」を全体監修した。

## 小澤基弘（画家、埼玉大学教育学部教授、東京学芸大学大学院教授）

専門は絵画及び美術教育で芸術学博士。約30年間にわたり、個展やコンクールを中心にして制作発表をしてきた。また、「絵画の教科書」等、著作多数多く刊行し、絵画を中心とした理論研究も行ってきた。近年は、絵画の制作者としての経験を踏まえながら、学校教育における図工・美術教育の研究も同時に行っている。「ドローイング（主観的・表現主義的素描）」を制作の主たる手立てとし、大学教育においてもドローイングを積極的に導入し、ドローイング制作と対話を通じて、学生それぞれが自らの表現の核心を主体的に探る教育を心がけている。こうした教育実践から、人間の表現の根源に関わる障害者アートの可能性に近年は着目し、その領域の研究も始めたところである。

## 酒井道久（彫刻家、元埼玉県立大学社会福祉子ども学科教授）

東京藝術大学大学院修了。新具象彫刻展（東京都美術館）創立に参加。国際交流展「センツア・フロンティエーレ展」、「彫超兆 彫刻8人展」、その他、個展、グループ展などを行ってきた。また、埼玉県立衛生短大、埼玉県立大学社会福祉学科で美術関連教養科目、保育関連科目を担当し、障害者アートの研究指導（ゼミ、卒業研究）や、不登校児童と家族のためのアートプログラム、若年性認知症の患者と家族のためのアートセラピー（科研、学内奨励研究）などに携わってきた。彫刻家としての主な作品：大島小学校創立50周年記念「まだ見せない宝物」、千駄ヶ谷小学校創立120周年記念「大発見」、「中西悟堂像（日本野鳥の会）」（軽井沢ホシノ、野鳥の森）、伊能測量200年記念「伊能忠敬像」（富岡八幡宮、江東区）など。

## 中津川浩章（画家、美術家、アートディレクター）

記憶・痕跡・欠損をテーマに自ら多くの作品を制作し国内外で個展やライブペインティングを行う一方、アートディレクターとして障害者のためのアートスタジオディレクションや展覧会の企画・プロデュース、キュレーションを手がける。「できないことからつながる社会」を目指して福祉、教育、医療と多様な分野で社会とアートの関係性を問い合わせる活動に取り組む。障害者、支援者、子どもから大人まであらゆる人を対象にアートWSや講演活動を全国で行っている。2012～14及び2016「埼玉県障害者アート企画展」、2016「ビッグ・アイアートプロジェクト」（国際障害者交流センター）、社会福祉法人みぬま福祉社・工房集ほかのアートディレクションや、川崎市岡本太郎美術館「岡本太郎とアール・ブリュット」展のキュレーションに携わる。NPO法人エイブル・アート・ジャパン理事事、NPO法人アール・ド・ヴィーヴル理事、一般社団法人Get in touch理事。

障害者の表現と出会い、それぞれの立場から表現活動の支援や普及に関わり続けていたり、美術の専門家4人が、「障害者の表現の魅力とは何か」、「アートの本質とは何か」、さらに、埼玉県独自の支援活動やその可能性について、時に脱線しながら熱く語り合いました。

## 彼らの「知性、が美術教育を変える

**中津川** それぞれアートの側面から障害者の表現と関わってきた中で、自身の価値観などに変化はありましたか。

**酒井** 私は、大学で教えていた頃、実習で保育を学ぶ学生を連れて表現活動をしている福祉施設を訪れ、障害者アートに関わるようになりましたが、私個人は、それとはいわば対極のアカデミック教育をみっちり受けた作家です。創作活動を続ける中でいつも、障害者アートをうらやましく思つて見てきました。彼らは、教育を受けた者にはなかなか使えない色を使って表現しますよね。色の取り合わせとか、こだわり方とか…、本当にうらやましい。ジエラシーを感じるくらいです。実際、盗んだりしたこともありますが、あのようににはいかず、いつも悔しく思っています。

**小澤** 私は、埼玉県の支援事業「障害者人材育成資金」（平成20年度より美術、学術など5分野の発表活動を補助）の審査委員をしていた時に、毎年、すごい作品を出す団体があり、5年目に知りたい衝動が止められず訪ねたのが工房集でした。そこで一番驚いたのは、重度の障害のある方々が一様にいい作品を作っていること。そして、今日の展覧会を見ても、表現の強さに打ちのめされますよね。どの作品にも強度がある。一方、大学の学生は、あれだけの強度のある表現ができない。

どつぶり美術教育を受けているのに、いったい美術教育とは何なのか、必要なのか、考えさせられます。美術教育をほとんど受けていない人たちの作品は、ユニークで強烈で、しかも造形的にバランスがとれ、知的です。造形力が知性だとすれば、すべての展示作品に知性がある。

**中津川** 障害者の作品を語る時、「内面的なエネルギー」とか「原始のチカラ」といった紋切り型の言葉で本能のまま描き客觀性はないように評されることが多く、なかなか「知的」という言葉は聞きませんが、小澤さんは、「ドローイング論の著書で、彼らの作品には『止めどころ』があり本質的なところに客觀性や知性があると論じていますね。

**小澤** 作品、特に抽象的な絵画は「筆をどこで止めるか」だといわれますが、それを判断するのは

知性。それと同様に、彼らの作品も自己省察であり、内的に何かが起きて止めている。つまり、それが知性。アートがそれを健在化させているのです。障害者のアートを知ることで、その人間に秘められた何か新しい知性が暴ける。彼らの作品と出会い、そういうことを研究して教育に還元したいと思つようになりました。

### 從来の美術と彼らのアートの相違点

**前山** 私は、2009年の「埼玉県障害者アート企画展」以降、「アール・ブリュット・ジャポネ」

「すごいぞ、これは！」など障害者アートの展覧会を開催し、その作品選考もしてきましたが、作品を選ぶ基準には、基本的に現代美術と障害者の変わりはないと思っています。私の世代は「作品を作者から切り離せ」と教育を受けたので、どんな作品でも基本、作家は二の次です。学芸員は、作家に深入りせず、一旦、冷めた目で作品を見る。

一方、福祉の方々は、作家が発想の基本にあるところが、私もやってみてわかったことです。が、良かれ悪かれ作家や家族や施設の人たちと関わってしまう。その人たちの人生に踏み込んでしまうと感じました。それが自分の変化でもあり、違うを感じたところです。大抵は喜ばれ、「家族の作家を見る目が変わった」などと聞くと私もすごくうれしい。けれど、いいことばかりではないかも知れない、という思いもあります。

**中津川** 障害のある作家が「ユートラルな状態で創作できるよう、ほめたりもしないアトリエもありますが、支援する立場では、どうしても人生に踏み込んでしまう。特に、表現を自分で社会化できない作家の場合、施設の哲学などで作品の方向性も変わってくる。どこまで関わっていいか、みなさん距離を試しながら、役割を摸索していると思います。

**酒井** 作品選考で「作品と作家を切り離す」という点については、私もそう思っています。なるべく作家の背景を知らずに作品を見た方がい



い。が、知らないと判断を誤ることもある。今回の出展作の一つ、「写実的な汽車の風景画」を学生たちと見た時、「この人どこが障害なんだろう」「写真を見て描いたに違ひない」と話していたのですが、後で実は、記憶で描いていると聞きました。知ついたら、見方が変わつていたかもしれません。

**前山** 「すばらしいぞ、これは！」展で、「作家が見えた方がおむしろい」「制作中の映像も流すとよりおもしろい」という意見が出た。「作品と作家を切る」に反するというか、そこが通常のアートと違うところかなと思います。私は障害の程度は、解説にも特に入れなくていいと思つていますが、どのように制作したのか、現場の雰囲気みたいなことは、出した方が、理解も共感も深まるのでは、といふ気がしてします。

**酒井** 制作の様子は私もみた。ただ、反論ではありませんが、その点は、健常者の作家についても同じです。ピカソの制作風景のビデオなんかは、本当におむしろいですよ。

#### 「障害者アート」の枠は過渡期のあらわれ

**中津川** 先程の酒井さんの「彼らがつらやましい」といった話は、小澤さんの「新しい知性の発掘」にもつながりますよね。僕も長年、彼らの表現に関わってきて、記憶や光を感じる力が優れていた

り、色の感覚がとても豊かだつたり、例えば聴覚が過敏で生き辛さはあつても僕らと違う感覚の広がりを持ち、いざ、表現するとそれが強度のある作品になる。しかし、そういった側面で、やつぱり「障害者アート」と区別されてしまう。別に、全部が「アート」でいいと思うのですが、まだまだ、住み分けがありますよね。その点については、どうお考へですか。

**前山** この用語の問題を、会議で話してみると、それだけで終わつてしまつくらい、立場でいろんな考え方があり、主張も違う。私の考えでは、アート全般、グルーピングしない方がいい。ただ、「～派」とつけた方が、美術の世界で突破力が出る、と話す作家たちもいます。それにより、歴史化もしやすい。つまり、グルーピングするとの利点もある。が、弊害も多い。すべて何の境界もない状態で展開するのが理想で、そうありたい。しかし、現状では、過渡期かなと思います。グルーピングして物事を考えた方が、考えやすく、美術関係の中には、そうしないと考えられない人もいます。

#### 彼らの表現に人間の本質がある

**中津川** 毎日描いている障害のある人は多いです。それを考えると、それだけ集中力があり、その反復の中から、ポンッと飛び出したり、「反転」したりして、おもしろい作品が生まれてくるかもしれません。そこに、実は知性みたいな何かが働いている。言語化できない言葉（思考・意思）や、芸術の大切なコンテンツが入り込んでいます。

**小澤** 私も同じで「障害者アート」というべきではないと思う。スポーツでは、明らかにハンディキャップがあるが、アートには、ありません。表現に関しては、たぶん健常者も障害者も

根っこは一緒。その中で、振り切れているのが、障害者の表現だと思っています。私は高校の時、脅迫神経症で一年休学し、その治療の一環で絵を描かされ、絵かきになった。施設で毎日、同じ絵ばかり描いている人がいると聞きましたが、私も毎日、同じ絵を描いています。その私の動機と障害者の動機とは、とても重なる。どこに障害者の線を引くのか。恐らく、違つて見えても同じ地平で、連なつているから区別する必要はない。きっとみなさんにも、彼ら同様、根っこにはキラキラ輝く何かがある。しかし、慣習とか規制とか教育などによりフタをされ、出てこられない。が、フタを外せば、スponettと出てくる。それを出てこられるようにするのが、教育なのかなと思ってます。美術教育が必要だとすれば、それがわかる人間、その地平まで下りてこける人間を、育てることだと思います。

ドローイングをさせています。主観的素描、いわば落書きです。それを見ながら一週間に一度、全員でぽんやり話をする。すると、自覚が芽生え、表現も本人も変わります。

**前山** そういうえば昔、ある現代アート作家のワークショップで、わら半紙の束にとにかく、苦しくても描き続けると、最後に本当の興味の部分が出てくる、と教わりました。

**小澤** 量の集積は質の変化を生む。これは、実です。たくさん描けば、質が変わる。ルーティーンワークでもいいから描く。するとある時、突然、変わります。不思議なくらい。学生、ほとんどそうです。描けない人も描けるようになる。表現教育とは、そういうもの。それは、落書きでいい。

**中津川** 障害のある人たちの表現には、かなり本質的なものがありますね。自閉症の人など、緑の植物を描くのに、最初からいろんな色を使う人も多い。美術教育では、これを印象派の技法として学びますが、彼らは、そんな方法論を知らなくても、本能的にできる。きっと彼らには、そう見えている。そう感じているのだと、思います。聴覚が過敏な子が、「朝からミミズの声がうるさい」といつたりするのは、きっと何か僕らと違う知覚があるから。僕らよりも何倍も世界の現象に過敏で、それがアートに転じた時、すごい表現にな

る。じゃあ、それが僕らとまったく切り離されいるかというと、それでもない。自分たちの中に、その要素がある。それを押さえつけ、まともな人間に近づけて、暮らしたり表現したりしている。そう考えると、やっぱり同じ。しかし、まだまだ「障害者アート」として区別される。この矛盾は、やっぱり過渡期。これから変わって行くのでしょうか。

それを踏まえ、現時点での「障害者アート」の課題や展望について、何がありますか。

#### 「障害者アート」を広げる危うさ

**酒井** 今、「障害者アート」の現状（課題）として一つ気になるのは、施設の職員が手を持って描かせるような作品も含まれてしまうこと。それは、本人の意欲にも喜びにもつながるかもしない。けれど、それを含めて「障害者アート」としていいのか。それは、機能回復や家族の喜びのためではないのか。作品は、作家の意図や意欲があつたものとするなど、最低ラインを考えていくことも、必要ではないかと思ひ。

#### 言語化できない表現がアートを開く

**中津川** よく「どれがいい作品か」「作品の評価基準は」などと聞かれますが、その点については、いかがでしょう。

**前山** 私の評価基準は、物欲を感じるか、自分が欲しいかどうか、です。美術館には、評価を文字に頼る専門家も多いが、自分の目でこれがおもしろい、きっとこの良さをわかる人がいる、という思いがあるから、作家の選定ができる気がします。

してうまく描こうとする。結構、あざとい。それも含め、すべて純粹というのは、違う。すべての作品を、アートとして語るのは、違うと思います。

**中津川** 人が関係し合い、影響し合う中で、表現が変わったりする点も、障害者と健常者のベクトルは、ほとんど変わらない。違いはむしろ、障害者の表現には、「表現の本質的なものがある」「アートの原点がそこにある」という点。しかし、社会の事情で「障害者アート」とされ、「障害者アートはこうしたもの」「だから促進しなければならない」といった固定観念から、さらに分断してしまう恐れもある。それにより、とんでもない誤解や偏見を広めてしまう危うさを、支援の活動でも考えていかないといけないと思ひます。

#### 「障害者アート」を広げる危うさ

**酒井** すべて素晴らしいことは、違う。例えば、時々「子どもの絵は純粹だ」など、ほめちぎる人がいるが、5歳位になると、人の目を気に



**中津川** 結局は、個人的な感覚判断に基づく。そこには、経験知があり、そのバイアスがかかり、作品を見分けられると思います。そして、アートは開かれてるので、誰もが自分の感覚で見ていい。

**酒井** 先程、TAMAP土〇の活動報告で支援担当者が、「自分以外のスタッフはアートに興味がない」と悩んでいましたが、美術や芸術を理解するには、別に絵を描けなくてもいい。見て楽しめればいいと思います。福祉の学生には、「それで80%わかったことになる」と教えてきました。例えば朝、起きて化粧して、ネイルして、お弁当の色合いを考える。それもアート。だからもっと自信をもつていいと。前山さんが話されたように、「自分が、どうか」と考えれば、もっと作品の選定も支援も、楽になり、樂しいものになると思います。

**中津川** 美術の世界には批評言語というのがあります、アール・ブリュットを研究する批評家が、彼らの作品は、「一般の美術の知識では語りきれない」「語りえないものがあるからおもしろい」といつていた。「欲しい」という志向も含め、一般的の言語では、解説できない。かなり作品に入り込んで、そこに至る精神病理学や障害など、人間本来の特性を言語化する能力がないと、批評言語として成立しない。たぶんアートの世界では、そんなコンテキスト（文脈）で批評する時代は、終わりつつある。その点に肉薄しないと、アート全般

がみんなのものにならないと思います。

### 未来のアートを育む埼玉を誇ろう！

**中津川** この「埼玉県障害者アート企画展」をはじめ、「障害者アートフェスティバル」や小澤さんが審査委員をしていた「人材育成資金」など、世間のアール・ブリュットといった一つの流行とは違う文脈で、埼玉県では表現活動をサポートしてきた。それが、今回のモテル事業やTAMAP土〇にもつながっています。最後に、この埼玉独自の取り組みについて、意見や展望などがあればお願いします。

**小澤** 取り組みは、すばらしい。が、それを掘り下げ、まとめ、発信することも、大事だと思います。障害者の特性と作品との相関など、大学がデータを集め、現場へフィードバックする。そんな地道な啓蒙活動も、必要だと思います。そういった連携のためにも、私がTAMAP土〇に加わりたい。もっと私たちを、利用してほしい。

**前山** TAMAP土〇の活動報告で、「埼玉は自慢が下手」という話がありました。が、「自分たちの活動は素晴らしい」と自覚する能力も、埼玉県民は、少し足りないのかもしれません。全国から評価を得ていても、「埼玉県の取り組みは、実はすごい」と、自分たちで適正評価できていない。毎年、県が続けている「表現活動調査票」など、非

常に貴重な情報です。が、その価値がわからなければ、使用済みの紙切れとして処分されてしまうかも知れない。過去の調査票もぜひ、大切に保管し続け、今後に活かしてほしいと思います。

**中津川** この展覧会の初期の段階では、「表現活動調査票」を基に、気になる表現については作家を訪ね、新たな表現を発掘して作品にして、展覧会を作つてきました。今、全国各地で障害者のアート展が開催されていますが、ほとんど作品は応募です。それ自体に問題はありませんが、いかにもアートっぽい作品が多くなります。施設職員や親が美術の知識があつたりして、例えばアール・ブリュットがテーマだつたりすると、それらしい作品に偏ることがある。支援者の裁量で作品が決まってしまう。その点、埼玉は、調査票などで、作品だかわからない、驚くような表現が出てくる。今回の展出作でいえば、ティッシュを微細に丸めた作品。あれは、「これがアート」と誰かが決めたのではなく、ここにいる美術の専門家とTAMAP土〇の福祉現場のメンバーが、一緒に選考会で考え、「やっぱり、何か心を揺さぶるものがある」「みんなに考えてもらおう」と出すことを決めた作品です。

みなさんの中には、美術展の作品は、答えや回答だと思っていらっしゃるかもしれません、実は、いつも問い合わせます。世界に対する問い合わせです。表現や、人間に対する問い合わせとして存在している。そう考えると、僕らの想像を超えたものが、



彼らの表現の中には、埼玉はそれを、ちゃんと发掘しながらやっている。

福祉とアート、そして教育も含め、異なる者がつながり、線になり、面になるような取り組みを、今後も広めて行きましょう。

### ■質疑応答

**【質問1】** レジュメの議題にあつた「人間にとって表現とは？」についてお聞かせ下さい。

**小澤** 表現するとは、自分の内的なものの痕跡、それを残すことがだと思う。それによって自分を客觀化でき、自己理解を深め、さらに促進されると思います。

**酒井** 表現を個性として置きかえたとすれば、個性とは、押さえつけても、押さえつけても、出でくるものと理解しています。

**中津川** 人はみな、障害や欠損、何か足りないことを表現する。そして、障害者の表現は、表現の「デフォルト（初期段階）」だと思う。仮の文学者、ジャン・ジュネが、彫刻家ジャコメッティについてのエッセイで、「美は傷口からしか生まれない」「その傷が美を生む根源である」と語るのを学生時代に読んで、これこそ本質的な言葉だと思いました。障害者の表現に出会った時、その言葉がよみ

がえり、自分の中にもそれがある。足りないものがあるから、埋めようとするし、分かつてもらいたいし、見せたいと思う。それが、表現の根本だと思います。

**前山** その話で、アーティストたちが「私たちつて、たとえ無人島に行つても何か作つてじるよね」といつていたのを思い出しました。誰かに見せるシステムがあろうがなかろうが、何か作りざるを得ない人たちが、やっぱりいる。それが、表現の原点だと思います。

**【質問2】** 作品を出しています。「仕事として」頑張つていただきたいと思い、作品を作つてきました。私や私たちみたいな作家は、今、仕事をしてじるところなのでしょうか？

**中津川** 仕事には、金銭的でない、自分としてのミッションもあると思う。それは、創作活動が、仕事として成立してない、という不安感があるところですか？

**質問者** 就職しないといけないのか、でも、やっぱり自分の作品を評価してもらいたいといった気持ちとの、葛藤に駆られています。どうしたらいいか、考え中です。

お金がかかるので、みんな人生の節目の度に悩んでいます。

**中津川** その悩みは、普遍的なもの。就職してもしなくとも、僕は構わないと思います。それでも、湧き上がつてくるものがある。その中で、作品を作る営みを続け、成長していく。そして、それに伴う評価には、タイムラグがある。いい作品であつても評価は、10年後に迫つることもある。あきらめずに続けてほしいです。

**小澤** 海外では、買う人がいるから作品が売れる。けれど日本人は、買わないから、作家が食えない。作品が売れるには、買う人を育てないといけない。ですから、みなさん、買いましょう！ 飾つて楽しみましょう。巡回サイクルを作ることは、我々の責任でもある。

**前山** 80年代にあるアーティストの作品を3千円で買ったのですが、いまだに感謝されます。初めて売れた作品だったそうです。そんなこともあるので、みなさん買いましょう！

**酒井** みんなさんがおっしゃった通りです。私も創作活動を続けていますが、妻からはいまだに「趣味でしょ」といわれています。最後に、暗い話ですみません。

※掲載にあたり発言の一部を要約したり  
順番を入れ替えたりなどの編集を加えました。

